

「2023年度タイ・チューラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学経済学部1年 若本 綾乃

① 学習成果

短期留学を通して、私の異文化交流の経験は大きく変わった。最初は、タイと日本が全く異なると予想していたが、実際には割と似ている。生活面では日本と同じように過ごすことができ、予想以上に違いが少なかった。留学前は海外の人とのコミュニケーションが少なかったが、今回はタイの学生たちとガッツリと交流できた。日本語でのコミュニケーションが取りやすかったこともあり、たくさんの友達を作ることができた。留学の終わりでは、別れの機会があり、以前の卒業式や別れの経験とは異なり、タイの友人との別れが非常に寂しかった。物理的な距離がある中での別れが、感情的なつながりをより深く感じることができた。また、留学先の魅力に惹かれ、タイに強い愛着が湧いてきた。留学前は浅い理由で選んだタイだが、再び訪れたいという気持ちが強まった。この短期留学を通して得た学びは大きかった。二週間を自宅以外で過ごすことは、その滞在先が日本であったとしても、きっと特別な経験である。そのうえで、あえて海外を選んでよかったと感じた。留学先での経験は、日本では得られないものだった。

② 海外での経験

タイで多種多様な経験をした。それぞれ箇条書きで記していく。

タイへの留学前から好んで食べていたタイ料理。トムヤムクンやガパオライス、タイカレーなど、日本のタイ料理店で食べられる料理は日本で食べていたものと味が同じだった。しかし、現地で初めて食べたイェンタフォーやポートヌードルなどの麺類は、新しい味わいに出会った瞬間だった。果物も現地でしか味わえないもので、日本の果物とは異なるすっきりとした味わいに感動した。しかし、日本の果物と違うため、なんだかしっくりこなかった。故郷の果物に懐かしさと愛着が湧いた瞬間でもあった。

留学初めは、タイの交通量の多さと、強引な運転に戸惑っていた。特に横断歩道を渡ることができるのか心配だったが、滞在するにつれて徐々に慣れていった。興味深いことに、タイ人自身もタイ人の運転が怖いと感じていることを知り、異なる文化の中での交通事情に触れることができた。

現地の学生に誘われ、タイダンスの体験をした。手と足が異なる動きをする難しさに直面したが、学生たちの優雅なお手本に感心した。一つ一つの動きには深い意味が込められており、タイダンスの美しさを実感した。

バンコク国立博物館では、仏教芸術に触れる貴重な機会が広がった。寺院の壁画がブッタの生涯を描いていることや、異なる仏像様式について学ぶことができた。仏像は日本の仏像とは異なり、ブッタやヒンドウーの神々をモデルとしたものが多かった。またラーマキエンというラーマヤナに基づく物語に触れ、その人形劇や仮面劇の道具の美しさに感動した。

タニヤ通りはまさに日本ストリート。日本語の看板が並び、異国でありながらもどこかで懐かしさを感じた。しかし、同じくらい異なる印象を与えるのではないかという疑問が湧き上がった。自国の風景が、異なる文化から見るとどのように映るのだろうかと考えさせられた。

タイ料理に不満はなかったが、日本食が恋しくなり、留学中にも日本食を楽しむ機会を得た。特に味噌汁の美味しさに感動し、故郷の味を改めて実感した瞬間だった。異国での日本食体験は、思わぬほどの感慨を呼び起こした。

ヤワラート通りでは、日本では見られない風景に出会った。偽ブランド商品が並ぶ店や、異国での価格交渉、寄付をもらうために頑張る老人の姿。そして、中国語の看板が並ぶ通り。留学を通じて、自分が見慣れた風景が異国でどのように変わるのかについて考えさせられた。

アユタヤの博物館や遺跡を訪れ、タイの歴史と文化に触れた。遺跡の中でゲームの世界に入り込んだかのような

興奮を覚え、異なる特徴を持つ遺跡が飽きさせなかった。象に乗る体験も、一生の思い出となりうるものだった。ワット・アルンやワット・ポーでは、美しい寺院の中に細かい装飾が施されていた。特にワット・アルンの巨人が塔を支える装飾は可愛らしささえ感じさせた。留学を通じて、建築や芸術における異なる美意識に触れることができた。

アラビア語の履修経験を生かし、ナナのアラブストリートへ足を踏み入れた。現地の学生に案内されながらも、周囲にいる人々の顔ぶれが異なり、まるで別世界に迷い込んだような錯覚に陥った。現地の学生自身も「タイじゃないみたい」と驚くほど、タイ人の姿が見当たらない光景に、留学の冒険心が更に刺激された。学生からの「荷物を取られないように気をつけてね」という言葉に少し緊張した。アラブストリートに到達すると、看板にはもはやタイ語がなく、英語とアラビア語のみが目に入る。アラブ料理店では、タイ語表記のないメニューに直面し、英語を解読しながら料理を注文。現地の学生とともにテキトーに選んだ結果、机の上がパンだらけになり、笑いがこみ上げた。

タイでは3か所のモスクを訪れ、異なる宗教文化に触れる機会を得た。モスクの周りは、ムスリムの居住区になっており、アラビア文字や「HALAL」表記が目立つ。モスクに併設された学校では、子どもたちが「ビスミッラー (In the name of Allah)」という声を聞く。特にジャワモスクでは、モスクの管理人との対話を通じて、イスラームがクルアーンに行動指針が書かれているだけでなく、社会的・道徳的な原則も含む、生活の在り方を指すものだと聞いた。このことは日本でも聞いたことがある話だが、同じ話をモスクの管理人から聞けると思っておらず、少し驚いた。

③ プログラム内容

日本で受けたタイ語の授業が、実際のタイでの生活で大いに活かされた。特に挨拶や数字は日常的に使用され、その実用性に驚かされた。先生の徹底的な発音指導のおかげで、タイ語を発音する楽しさに気づくと同時に、地元の人々と円滑なコミュニケーションが可能になった。また、先生がタイ料理についても教えてくれたおかげで、食堂で口頭で注文することもできた。

テーマを何個か考えておいたのは役に立ったけれど、あらかじめ日本でのプレゼンの準備をする必要はあまりないと思う。現地の学生とテーマを決め、役割分担して準備を進められた。私のグループは、現地の学生が7人、うち日本語で積極的にコミュニケーションを取る人が2人だった。タイ人同士で話し合っ、その内容を伝達してくれる感じ。準備の中で、日本文化についてタイの学生に「どうしてなのか」と尋ねられ、しどろもどろになったのがいい経験だった。日本に住んでいても知らなかったことがたくさんあり、日本について再発見するきっかけになった。

タイで行われたタイ語の授業は、一部が日本で学んでいた内容の復習、一部が新しい学習という形で進められた。幸いなことに、日本での学習内容との重複が多かったため、負担を感じることなく、新たな知識を取り入れられた。

英語で仏教の授業を受けることは大変だった。専門用語や概念を英語で理解する難しさに直面した。そのため、授業中はiPadでchatGPTを動かして理解を深めていた。

④ 進路への影響

長期留学にはあまり関心がなかった。しかし、今回の二週間の短期留学を経て、留学に対する興味が湧いた。たとえ短期間であっても、日本を離れて生活することは非常に面白く、他にはない経験だった。この短い期間に、できるだけ多くの場所を訪れるために時間を有効活用することが求められ、その中で忙しさを感じた。長期滞在で得られる体験は、きっと今回のような短期留学とは異なるのだろう。異国で生活するという経験をしてみたいと感じた。